

作家というものはこの世界に 恋をしていなきゃならないんだ

もがみたかふみ — フリーライター

『パパ・ユーアクレイジー』 ウィリアム・サローヤン



『パパ・ユーアクレイジー』はアルメニア系アメリカ人ウィリアム・サローヤンの小説だ。この作品は、息子の視点から、主に作家である父親との会話や生活を描いている。

作品の冒頭で、父親は息子に一つ仕事をあげよう、と言い出す。

「仕事って？」

「仕事さ、小説を書く」

「僕、書き方を知らないんだ」

「知っているとうそぶいて許されるのは偉大な作家だけだ」僕の父は言った。「お前にはまだ早い」

「だって、僕は何を書くの？ 何について？」

「お前自身についてさ、もちろん」

「僕自身？ 僕って何だろう？」

「それは小説を書いて発見するんだね。私は私で料理の本を一冊書こうと思っている」

(『パパ・ユーアクレイジー』より)

軽口が多くて理屈っぽくて能弁な父親と、まっすぐに純粹で、軽々と理屈を飛び越える息子。二人は生活を共にし、折に触れて人生や、小説を書くことについて対話する。この対話が、いかにも小学生の男子と語っているような、あの奇想天外な面白みにあふれている。クレイジーな対話が、毎日の生活の中に織り込まれている。

私がサローヤン大好きな理由は、そのユーモアだ。サローヤンの視点から描かれる人物たちは、みなどこか優しく、ユーモラスだ。

「あなたは本当に料理の本を書くつもりなの？ 父さん」

「もちろん私は書くつもりさ。お前は本当に小説を書くつもりかね？」

「ウン。僕、書いたっていいと思ってるよ」

「思ってるだけじゃなくて、本当に書くつもりはあるのかな？」

「僕はトマトって綴れないんだ」

「ポテトはどうだい？」

「僕はポテトも綴れないよ」

「どんな言葉が綴れるのかね、お前には？」

「僕の名前」

「じゃあ、お前は小説を書く用意はできてるわけだ」

(『パパ・ユーアクレイジー』より)

ユーモアとは一つの愛情の形だ。サローヤンはその描くものを愛しているし、そのことをありのままに、生き生きと書き出してくれる。

「作家というものはこの世界に恋をしていなきゃならないんだ。さもなければ彼は書くことができないんだ」

「どうして書けないの？」

「それはね、善いものはすべて愛から発するからさ。作家がこの世界に恋をしている時、彼はすべての人に恋をしているわけだ。そのところを本気で追求してゆけば彼は書くことができるのさ」

(『パパ・ユーアクレイジー』より)

この愛すべきユーモアこそが、サローヤンの作品を繰り返し読みたくなる、どの作品にも共通した魅力だと思う。

英文学研究をしている友人に「実はサローヤンが好きなんだ」と打ち明けたら、彼は「へえ」というように眉を上げて「今でもサローヤンなんて読む人がいるんだね」と論評した。

そうなのだ。今でも、後でも、ずっと私はサローヤンを読むだろう。それは愛すべきもののことを私に想起させ、愉快的気持ちにさせる、温かいコーヒーのような小説なのである。☺